

最高学部

2024 年度最高学部前期課程修了研究旅行について

小田幸子 咲花昭嗣

最高学部の前期課程修了研究旅行は、2012 年度から始まったプログラムである。それまでは 2 年課程 2 年生(女子のみ)が「卒業旅行」として関西への旅行を行ってきたが、前期課程修了を前に、両課程の 2 年生全員が旅行を行うこととし、歴史的経緯を踏まえ目的地を関西(女子)と新たに九州(男子)の 2 か所とした。関西は「主に日本の歴史・文化・美術工芸」、九州は「主に近代日本の社会(産業・戦争・公害)・宗教」に焦点を当てて学ぶことを目的として実施している。2023 年度からは目的地を学生が選択できるかたちとした。

1. はじめに

はじめに前期課程修了研究旅行(以下、研究旅行)について概観しておきたい。

創立から 2 年後の 1923(大正12)年、羽仁もと子が「どうか自由学園の卒業生として確かな成長をしてほしい」と願い、自ら引率して高等科入学の卒業年次生(女子部 1 回生)と共に奈良・京都への卒業旅行を行った。翌 1924 年は、前年の9月に関東大震災が起こったため旅行は行われなかったが、1925 年には 3 回生が大阪・北九州への卒業旅行を行った。その後、戦中・戦後と卒業旅行は途絶えたが、1962 年創立 40 周年を機に当時の女子学部 2 年生(女子部 41 回生)により卒業旅行が再開された。行程は、東京芸術大学の古美術研究旅行を参考に構成された。関西の旧父母会(保護者会)、友の会、卒業生会(女子部の卒業生の団体)などにも支えられ、1999 年度の最高学部新体制発足後は 2 年課程の卒業研究旅行として行われてきたが、2012 年度から学部 2 年生全員が研究旅行に参加する体制となった際に、女子学生の旅行として受け継がれた。その際の男子学生の旅行の目的地の検討に際しては、創立者の出身地である八戸(青森県)や防府(山口県)なども候補に挙がったが、最終的には九州を目的地とした。

2020、2021 年度は新型コロナウイルス感染症対応として学園でも宿泊を伴う校外学習を行わないことになり、日帰りでの研究旅行を行ったが、2022 年度には宿泊を伴う旅行として再開した。その時より関西はそれまで 5 泊 6 日で行ってきた旅程を、九州と同じく 3 泊 4 日に短縮して実施することになった。

2024 年度の研究旅行は、2024 年 12 月 3 日(火)～6

日(金)の日程で行われた。

2. 九州

参加者:学生 8(女子 3, 男子 5), 引率 1(咲花)

- 1 日目:羽田空港～鹿児島空港～知覧地区(特攻平和会館)～鹿児島市内
- 2 日目:水俣病歴史考証館・水俣市内～長崎
- 3 日目:長崎(大浦天主堂, キリシタン博物館)～グループ行動(A:軍艦島周遊ツアー, B:聖コルベ記念館)
- 4 日目:長崎(平和公園, 爆心地, 原爆資料館, 市内散策)～長崎空港～羽田空港

1. で述べたように九州の研究旅行は、当初学部 2 年男子の旅行として 2012 年にスタートした。これは、1925 年に高等科 2 年生(女子部 3 回生)の卒業旅行として羽仁もと子の引率で九州・関西を訪れたことを踏まえて、現代風にアレンジした旅程を組んだものである。2012 年～2015 年は、高千穂・阿蘇・咸宜園(日田)から長崎へのルートで行っていたが、2016 年 4 月の熊本地震による阿蘇地方の道路状況悪化に伴い、2016 年からは知覧・水俣から長崎に入るルートに移行した。

この旅行のテーマは、「人間の生と死から環境・歴史・社会を考える」。近代化を追求してきた日本の、とりわけ公害や戦争によって市民の生活がどのように変わっていったのか。宗教弾圧の中にあって受け継がれた信仰を通して人間が生きることの意味は何か。参加した学生それぞれが、いくつもの問いと向き合う旅行になった。

1年次の必修科目「環境と経済・社会」では、経済学と環

境工学の視点から水俣をケーススタディとして、石牟礼道子『苦海浄土』を課題として取り上げている。また、2年次必修科目「自由学原論」などいくつかの科目でも、自由学園卒業生の戦争体験や隠れキリシタンを取り上げ、人間の尊厳とこれまでの歴史に触れている。それらの学びのフィールドワークとしてもこの旅行の意義は大きい。

今年度もそれぞれの訪問先で貴重な学びを得られた。特に、例年は遠藤周作文学館に行くグループは改修工事で休館だったため、コルベ神父の記念館を訪問した。ちょうど、ポーランド研修旅行参加学生のグループだったため、アウシュヴィッツでの経験と結びつく経験となった。



図 2-1 知覧特攻平和会館にて



図 2-2 水俣湾を前に小泉さんの説明を受ける



図 2-3 大浦天主堂にて



図 2-4 平和祈念像前で黙祷

3. 関西

参加者;学生 8(女子7, 男子1), 引率 1(小田)

参加者は「自由学原論」「生活芸術基礎」などの講義との連関をもちながら、事前に見学先についての調べ学習を行い共有した。また、當麻寺との関わりから折口信夫『死者の書』(人形アニメ版)を事前に視聴しておくことを推奨した。

1 日目:東京～京都～奈良(山の辺の道, 飛鳥)

東京駅から京都駅からは新幹線, 京都駅から橿原神宮駅までは近鉄を利用し, その後はマイクロバスで今回の山の辺の道の入り口となる橿原神社に向かった。山の辺の道は日本最古の道として知られ, 奈良市内から桜井市までが整備されており, その中の一部の三輪山山麓を巡る橿原神社から大神神社までの約 1.4 キロを散策した。その後, 奈良文化財研究所飛鳥資料館で飛鳥地方の歴史やこれまでの発掘成果などについて学び, 石舞台古墳, 飛鳥寺を巡ったのち, その日の宿泊先である飛鳥寺研修会館修徳坊に向かった。夕食には飛鳥地方の郷土料理である「飛鳥鍋」をいただき, ここでもまた土地の歴史を感じることができた。

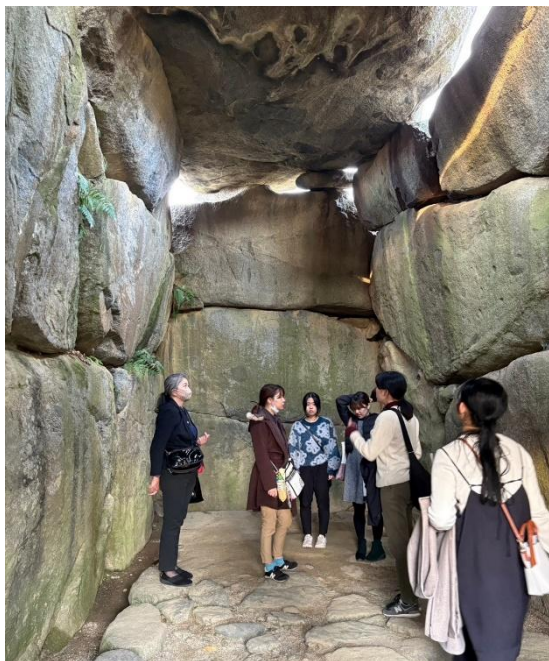


図 3-1 石舞台古墳 (内部)

2 日目:奈良(甘樫の丘～當麻寺～法隆寺～慈光院)

朝食後, 研修会館の隣地に在る飛鳥坐神社を訪れた。

そこで偶然, 第 87 代目宮司の飛鳥様にお目にかかり貴重なお話を伺うことができた。その後, 甘樫の丘に上り風致地区条例により歴史的な景観を維持している明日香村と, 開発の進む橿原市方面の様子を比較して眺めることができた。

次に大阪府と奈良県の境に位置する二上山の麓にある當麻寺に向かい塔頭の一つである中之坊に伺った。ご住職の松村様より中将姫と當麻曼荼羅について, 折口信夫の『死者の書』と當麻寺についてなどのお話と, 曼陀羅の「絵解き」を伺った。続いて曼荼羅堂, 金堂の他, 国指定名勝・大和三名園の1である香菴園を案内していただいた。次に法隆寺に向い, 2 グループに分かれてボランティアガイドの方に解説していただきながら回ったが, 静かだった飛鳥の地に比べると修学旅行の中高生の姿も多くみられるようになってきた。この日の最後に慈光院に伺い, 国指定名勝・大和三名園の一つであるお庭を拝見しお抹茶をいただきながら, おもてなしや茶道について貴重なお話を伺うことができた。この日は市内のホテル美松に宿泊した。



図 3-2 當麻寺 曼荼羅堂を背景に



図 3-3 法隆寺 五重塔を見上げる

3日目:奈良(東大寺〜興福寺〜古梅園)〜京都(平等院)

この日はまず東大寺法華堂、次いで興福寺国宝館を訪れ多くの優れた仏教美術にふれることができた。次に、約400年以上前から続く製墨業者である古梅園にて製墨過程を見学させていただいた。かわらけに注いだ植物油を燃やして煤を集める採煙作業から、膠と合わせて墨を練り成型して、湿度の違う木灰に墨を埋め少しずつ乾燥させる過程を一つひとつ職人たちが手作業で行っている現場を見せていただき、さらに先の百年を見据えて材料を確保しているとの話を伺った。技術の継承には、人間側の計画性や熱意だけではなくそれを支える材料が存在することが不可欠であることを知った。古梅園見学の後は、京都府に入り、平等院の内陣を拝観したあと、鳳翔館(ミュージアム)を見学した。内外多くの観光客でにぎわっており、静かだった奈良との違いを肌で感じた。この日は、京都太秦にある菊香荘に宿泊した。



図3-4 平等院

4日目:京都(大徳寺〜市内自由見学)〜東京

午前中に大徳寺真珠庵(通常非公開)の拝観の後、夕方の京都駅での集合まで自由見学を行った。真珠庵は一休宗純を開祖とする塔頭であり、著名画家による襖絵やお茶室などについて丁寧に説明をいただきながら、拝観することができた。その後、学生は妙心寺などを回り、16時40分に京都駅に集合し関西の卒業生、旧父母の方々のお見送りを受けて、新幹線にて帰京した。

振り返りレポートに書かれた感想を以下に紹介する。

「日本史の授業で習ったが忘れていた部分もあったので、事前に調べ現地に行き学びを深めることができたことは良かった。古梅園でのお話にあったが、海外の人も日本の文

化に興味を持ってくれる人が多く、春期に来ていたTAの方も日本の歴史をとて勉強していて、私より日本の歴史に詳しくあった。日本に住む私たちがその国の歴史に疎いことは勿体無いと感じた。今後、海外の人と関わる機会は年々増えていくだろうが、日本の歴史・文化を海外の人や後世に伝えていくには、勉強して知っておかなければならない。今回奈良・京都に行き学ぶことが沢山あった。自分の興味のある部分から始め、自分の住む国を大切にすることや国際関係をよくするためにも、もっと歴史に触れていきたいと研究旅行を通して、考えるようになった」

「私は日本史の特に古代・中世史が好きなので、研究旅行では関西を選択した。実際、見学に行った場所はどこも面白く、興味深い場所だった。個人で行くのでは聞くことができないお話があったり、感想を共有できたりと、研究旅行ならではの機会がたくさんあった。また、4日間とも天候に恵まれ、紅葉も残っていたため、どこへ行ってもとても良い景色を見ることができた。全ての行程を通して、私たちが暮らしている日本という国の原点、移り変わりの一部を見ることができ、当時の状況や当時を生きた人々の気持ちに思いを馳せることができた。また同時に、歴史や想いの詰まった文化財を守り、丁寧に管理、修復、継承されてきたことは当たり前ではないのだと感ずることができた。学部での学びの区切りとして本物を自分の目でよく見られたことは、良い経験となった」

「小学生で訪れて話を聞いた時よりもはるかに楽しかった。大学2年だからこそ聞いていて面白いと感じるのかもしれない。飛鳥時代に建てられた建築。平安時代に作られたものよりも丈夫な作りで釘をほぼ使わない製法。廊下の木一本一本が手作りであるということ。昔の人々が作ったとは思えない技法に驚かされた。時代を経て再建される建物が多々ある。それは致し方ないと思う。しかし、先代が繋いできたものを復元、記録という形で残していくことはできる。その当たり前のことをこの旅行で感じるとは思わなかった。小学生の頃には何もわからなかったが、今ならその価値がわかる気がした。この旅行を経て自分の知らない世界を一つ知ることが出来て、これからの生活でまた別の視点から、今の私自身で歴史や文化を知って行きたいと思った」

最後に、この九州・関西への研究旅行を実施するにあたり多くの方にお力添えをいただいたことに感謝申し上げる。